第三章　書評その他

一　石上韶訳『巴金　真話集』

巴金は、今年の五月、東京で開かれる国際ペン東京大会に出席する。その大会で何を話し、どの程度突っ込んだ話をするか？　これが、今の中国文学界の自由度のメルクマールになる、と私は学生に言った。なぜそんなことが言えるのか？『巴金真話集』を読めばわかる。第一集『随想録』第二集『探索集』を併せて読むともっといい。そうすれば、巴金がこの大会に出席するということだけでも大変なことがわかるだろう、とも言った。

石上韶氏の訳は、第三集の『真話集』ともなると、こなれて読みやすく、石上氏の語りが巴金そのものの語りとして定着した。訳注もよい。単なる語注だけに終らず、今回は語の背景の説明に気を配り、内容理解の為の注となるよう努力を払っているから、一九八一年から八二年前半のどんな情況に巴金が置かれていたかが、この『真話集』によってわかる。今、なぜ巴金なのか？『真話集』がその解説となっており、この出版は大変時宜に適っている。

訳注について。簡単な訳注は〔　〕を付けて本文中に入っている。例えば〔IIの三二、一一頁参照〕とあるのは、巴金の第二集『探索集』の第三二篇、一一頁をみよ、ということである。これは、第一集から持っ

ている読者には便利であるし、第三の『真話集』を、注だらけの繁雑なものになることから救っている。そう認めた上でなお、前の集を持っていない者に対して不親切ではないかと注文をつけよう。勿論、三冊全部買うのがいい、買って損しない本だと思うけれども。

訳文について、次の三点をあげる。一、「精力」を〝馬力〟と訳す箇所が四つほどある。名訳のような気もするが、巴金のことばとしてピッタリくるだろうか？　次に、「六三　茅盾同志を悼む」の最後の方で、「我想、多寂寞啊！」とある。それを〝私は、どんなに寂しかったかしれない！〟と訳しているがどうだろう？「なんと寂しいことかと思った」とでも平凡に訳すしか仕方がないが、茅盾が寂しがっているなと思った要素の方が強いのではないか？　三、「七十　雑誌『十月』へのあいさつ」で、〝身をもって模範を示し、私のために、文章を作り、人間になる道を指し示してくれた〟とあるが、たとえ読点があっても、私のために文章を作ったように誤解されよう。「文章を作り人間になる道を、私に指し示してくれた」とした方が原意に近いだろう。

私は、ペン大会での巴金の発言に注目すべきだと学生にも友人にも言ったが、ある友人は、いや何も語りやしないよと言う。先の一九八〇年の来日の際もそうだったと言う。しかし、果してそうだろうかと私は思う。

巴金のことばに注目してみよう。

〝国内で私はよく、欧米諸国では物質は豊富だが精神は貧困だ、と人が言うのを耳にし、私自身もそう考えたことがある。三回の訪仏では、いずれも上層社会に接する機会がなかったため、「物質が豊富だ」と特に感じたことも別になかった。文化界の人士とのつき合いが割合多く、理解もかなり深められたが、自分の心

を彼らの心と比べても、彼らが私より「精神が貧困だ」とは思えなかった。〃（八九　三度パリを訪れて）

私は、この何気ない描写から、巴金の闘いの姿勢を却って強く感ずる者ではあるが、その為には、『随想録』『探索集』『真話集』の三冊を読み通す必要があるかもしれない。あるいは、八二年の中国文学界の動きを調べるといった補助的努力が必要かもしれない。いきなり彼のことばを読むなり聞いたのでは、その「真話」はあまりにもナイーブでプリミティブな意見の発露としか思えず、もの足りなく思うかもしれない。

八二年五月三一日に書かれたこの文章では、欧米諸国（＝資本主義国）では物質は豊富だが精神は貧困だとする動きがあることが指摘されている。ただ巴金は〃と人が言うのを耳にし〃などと描写するので、何気なく読みとばしてしまうが、〃人が言う〃のは、決して雑談や感想のごときものではない。ある方向に収斂しようとする意図的な言論なのである。この動きがその後どう展開したか「訳者あとがき」も触れているし、昨年末の精神汚染一掃のニュースとして知られよう。そういう隠微で重大なことばだから、巴金はいちいち「　」をつけているのである。

そして、こういう外圧に対して、〃私自身もそう考えたことがある〃と、まず自己を対置させ、偽らずに検証する。これが、巴金の闘争を深みのある信頼のおけるものにしているのである。ただ、〃と特に感じたことも別になかった〃とか〃とは思えなかった〃という言い方はどうだろう？　どれも〃自分の心の中の話〃（後記）ではあろうが、そしてそれ故に、何者も動かしえない、作者の実感として強靱な力を持っているのではあるが、それにしても、あまりにも個人的なものに限定されていないだろうか？

例えば「八七　『人言畏るべし』」の経緯を読めば、巴金のこの姿勢へのいらだちは、中国でもあるようだ。〃「先生も過去に作家として、今みたいにたくさんの障害、たくさんの困難にぶつかられましたか？」〃と質

問された巴金は〝「大丈夫ですよ、私は一生罵られ放しですが、やっぱりこうして生きながらえてきていますよ」〟と言う。こういう実感は、巴金個人の経た風雪によって、ひとつの人生訓にはなっても、論理化して、個々の外圧に抵抗する普遍的な理念にはなり難いのではないだろうか？

『真話集』中最大イベントとしてある「七二　魯迅先生を追慕する」文の「文革」に関連した二カ所を、香港『大公報』が削除した事件は、「文革」に触れるのはまずいと、「長官（おかみ）」の意向を先取りして、作者に無断で削除したのであるが、こういう、外見をとりつくろって、真実としての作者の声をねじまげる「作風」こそ、『真話集』全体を貫く巴金の闘争の真の対象なのである。

巴金は、「真話」すなわち内省をともなった実感をもって闘う。そこに強さもあるが、一方〝彼は不平不満を言っているのだ。そんなことにとり合うことはない、自然に発生消滅するがままにさせておけばよいのさ〟（後記）と言う勢力が存在する。巴金が老躯をおして闘えば闘うほど、孤立化させられる危惧がないわけではない。そうとすれば、一見ユーモラスで余裕さえ感じられる「七五　わが孫娘端端」の、巴金の〝泣きたいような感じ〟も一層理解できよう。

巴金の闘いがどんなに困難にみちているものか、私は想像するが、真の愛国者巴金の態度は鮮明で意志は堅固である。〝「社会主義の精神文明を建設せよ」および「中華を振興せよ」の二つの大きな旗が私たちの頭上にひるがえっている。しかし、本当に人々を鼓舞して前進させるのは決してスローガンではなく、充実した、具体的な内容である〟（八八　上海文芸出版社三十年）と言い切る。そして〝まだ生きていることを証明するためにも、私は語らなければならない。何を語るのか？　やはり、真実を語るのである〟（後記）と、八十歳の巴金は表明するのである。

かつて、一九六三年一一月京都で、偶然の機会から、私は巴金と握手をしたことがあった。その時の、あの巴金の掌の暖かさは、忘れられない。私は、後にも先にも、あんなに掌の暖かいひとに会ったことはない。巴金の掌は、今も暖かいだろうか？

（一九八四、五、六）

二　加藤幸子・辻康吾編『キビとゴマ――中国女流文学選』

近年、中国の女流作家の活躍はめざましい。それを紹介することは大変意義があるだけでなく、魅力的なことだ。今回、〝文学の門外漢〟を自称する辻康吾氏によって、そして、氏の〝贖罪の気持から〟やっと中国女流作家の紹介が日の目を見た。大変うれしいことだ。

女流作家の活躍がめだつのはなぜか。たとえば、茹志鵑の「児をおもう」では、老共産党員が死に臨んで自分の息子に拘泥し、その教育、就職、結婚に、ひとりの母として、女としてあらがう。ここには女がおり、母がいる。血の通った人間が表現されている。張潔の作品しかり、諶容の作品もまたしかり。辻氏が概括する〝人間は人間であるが故に尊い〟という主張があるのである。どうしてこんなプリミティブな主張が、心を打ち、涙を流させるのか。その鍵を中国現代史が握っている。だが、あえて言えば、それを一歩でも二歩でも脱け出さなければ、作品は、中国でだって、まして世界的にも、〝文学〟として通用しはすまい。共編者の加藤幸子氏は、張抗抗の「夏」の〝軽快さとみずみずしさは、日本でも十分に通用する〟という表現で、みごとにこのことを、同じ女流作家としてとらえている。

この本の魅力は、だから、きわめて同時代的問題を投げかけているところにあるが、今は、この本が提起するもう一つの問題（翻訳）について、一言ふれよう。読者はできれば、戴厚英の小説集か《花城》を（原文入手について編集部が労をとって下さるとうれしい）開いて、伊藤克氏らによる、殆ど正確でなめらかな訳文をもとに、辻原登氏がいかに〝削除と入れ換え〟をしたか賞味してほしい。「キビとゴマ」は直訳調ではなく、原文にない心理を書き加えて、内容が日本の読者にスムーズに伝わるよう工夫されている。敬服に値する。三章の後半などすでに創作の域に達しているくらいである。だが、ここでは例を挙げないが、日本人にわかりやすくさせようとするサービスは、時には作品をセンチメンタルなものに限定しがちではないかと、辻氏の〝実験〟を成功と評価しながらも、付け加えたい。日本の読者は、そこまでやらなくてもじゅうぶん理解できるにちがいない。

三　小島朋之著『変わりゆく中国の政治社会――転換期の矛盾と摩擦』

この本は、序章「九十年代への展望」と三章に分けられた、二年間の月ごとの分析報告より成立している。扱う時期は、一九八六年一月から八七年十月の第一三期党全国代表大会（一三全大会）を最大のヤマとする、まる二年間である。この二年間は、中国政治社会が、八四年秋の経済改革から今度は政治改革へ踏み込もうとする転換期であり、画期的な二年間ということになる。この転換期にみられる矛盾と摩擦とは、九十年代の中国の各種の動きを規定するにちがいない。過去の二年間は、こうして、現在と未来の中国を考察する鍵となる。

この本の最大の特色は、「人民日報」や「瞭望」など四五種にものぼる新聞雑誌そして日本の新聞雑誌（一六種）や香港の雑誌（五誌）などを通じて、その月の中国の政治、経済、外交、文化、社会などを分析報告した三章にある。主として党や政府の公式文書を分析するが、その公式声明はもちろん、香港情報とてうのみにしたものはない。可能な限り広範囲の情報を集めていることと長年おこなってきた分析の蓄積とがある

からである。それはたとえば、八七年一月の胡耀邦「辞任」の分析に発揮される。この分析のうち、圧巻は軍部の動きの分析であるが、それはこの本を読んで頂くことにして、「これまでであれば、かなり一方的な〝真相〟暴露が公式に報道された」という指摘や、方励之など三名の党除名も、「共感者が多数いるはずだから三名の切り捨てにとどめられたのかもしれぬ」という指摘などは、持続した観察がなければ言えぬものであり、臨場感をもたせると同時に、信頼感をももたせる。

持続した観察と重層的な視点、この二つがこの本の特色である。

たとえば、一三全大会で出された「社会主義の初級段階」論をとりあげた際も、この論の特色などを述べたうえで、なぜこの理論が提起されたかと問う。そして、中国の時代認識に注意を喚起する。そこから、中国だけがアジア・太平洋地域の経済発展の中で、ＡＳＥＡＮ諸国やＮＩＣＳから取り残されてしまいかねないという危機意識を指摘する。この危機意識は、改革派も保守派もともに大きなワクにはめこんだ形になる。だから改革派からの大胆な改革理論も、そう簡単には後退しないであろうと判断する。この論理と判断は、十分に首肯できるし、快い。しかし、それだけではない。「理論はできても、めざす目的がうまく実現できる保証はないではないか」と指摘する。また、「できた理論自体にもなお疑念が残っている」ことも指摘する。こういう楽観的でない、重層的な視点がこの本をおもしろく読ませるのである。

なお、重層的な視点の一つに、多元的民主、多様な自由を求める民衆への視点があることを付言するのは、重要なことであろう。民衆の動きは、八四年秋の経済体制改革（著者によれば「パンドラの箱」）以来、体制内にビルトインされているが、だからこそ指導者は民衆の動向を無視しえなくなったと説く。この力学は、中国の政治構造の分析に大きな意味をもとう。だから、七里営人民公社や陳永貴の死（八六年三月）を扱っ

た際にも、単なる過去の栄光を慨嘆する事件とは扱わず、「農村には独自の指導者と農民の信頼関係の構造がある」ことを引き出しているのである。

著者小島朋之氏は、九十年代中国への三つの視角を提出する。一、鄧小平以後の指導体制。二、新指導体制内の新たな質の葛藤。三、政権と民衆との葛藤。

上述の如き、まる二年の緻密な情報分析よりするこの視角は、傾聴に値する。

四　蔣濮著　久保田・松本共訳『何処から来たかは聞かないで』
――日本で暮らす中国人の実像――

就学生、偽装難民と、中国は話題にこと欠かない。だが、彼らの思考や心理は、少しもわかっていない。三十歳をこえた子持ちの母親が夫と子供を残して、どうして外国へ一人学びに出るのか。また、女を先に日本へやり、金を稼がせて、後からやって来る男とは、どんな階層の、どんな経歴の者なのか。こういうことがわからないのだ。

おまけに驚いたことに、こういう男女が、この日本の、近くのアパートに住んでいたり、スーパーで買い物をしている。この一事だけでも、日本と中国は切り離せず、すました顔で過すわけにはいかない。

中国で新進女流作家として名の売れ出した蔣濮が、就学生を扱った小説を書いた。『何処から来たかは聞かないで』（久保田美年子・松本みどり訳）だ。彼女自身、日本の大学で研修しているので、その体験が書き込まれている。

だが、これは体験記ではない。小説（虚構）という濾過紙を通過したことで、現象の奥にある中国人の心

をとらえることができた。今、中国人を理解しようとする人には、この一見迂遠な方法にみえる本書が、なまじの研究書や概説書よりも役に立つ。

主人公は、就学生として日本に来た一児の母。物語は、彼女が苦心惨憺して小金をため、夫を日本に呼び寄せるところから始まる。約二年間のアルバイトの苦労の回想をまじえ、夫の焦燥や浮気、ブローカーの暗躍などを、新宿を舞台にくり広げる。

今さら就学生の実態でもないが、生活次元での日中の交流は、ここから始まったのだ。だから、就職と勉学についての各種の思考や奮闘がわかるだけでも面白い。さらに登場人物、特に夫の行動と心理を通じて、文化大革命とか精神汚染反対運動といった中国独自の政治がうかがい知れる。こういう政治が中国人にどんなに深く大きく影を落としているのかがわかる。政策が生活次元にどのように浸透しているかは、小説だからこそ表現できたことである。それだけではない。題名にあるように、登場人物たちの「故郷」を喪失し流浪する心情は、日本の管理機構に縛られている我々の心底にある「幸せ」への、絶望的でせつない願いと共鳴する。この点で、この小説は文学たりえてもいるのである。

五　張賢亮著　大里浩秋訳『土牢情話』
陸文夫著　釜屋修訳『消えた万元戸』

近頃、続けて二冊の訳本を読んだが、それは、張賢亮と陸文夫のものであった。訳者は大里浩秋氏と釜屋修氏である。発行元はめこんとなっている。めこんはアジアの文学書の紹介に早くから力を注いでいる。また、発行所は日本アジア文学協会という。ともに敬意に値する所である。本の厚さは二九六頁と二〇五頁、手軽なのがいい。なにより、一冊二〇〇〇円（税込み価格二〇六〇円＝消費税などという税の無駄遣いを助長する悪税のためこんな不愉快な値段になるのだ）で買えることは、大変喜ばしいことだ。

私の感想は、過去を描くことが意味を持った時期と、過去に固執することを厭う時期とがあるような気がするといったようなことであった。

もちろん「作家」の過去のことを言っているのだ。作家が自分の過去を書こうとすることは、何らかの安定が現在の自分にあることにほかならない。もしかすると、満足感があるから出来ることかもしれない。たとえそれが、反省の気持ちから自分の過去を暴き出すことであろうとも。

今は違う。たとえ表面上、世の中が安定していようとも、場合によっては社会が安定しているように見えるからこそ、かえって作家自身は安定せず、苛立たしい気分にとらわれている。自分の過去を自分で書くほ

どの、自己の存在感を感じることが出来ないと言っていい。自己の失落感でも喪失感でも崩壊感でもいい。少なくとも、そういう感覚を私自身も感じ、読み聞きもしている。自分の過去にどうして固執できよう。

もちろん、こういう時代だからこそ、過去を振り返り見ようとすることはある。中国の青年作家たちも、かの「尋〝根〟派」がそうであったように、自己の文化のよってきたるところを尋ねようとした。莫言も祖父母の生きざまを尋ねた。最近の李鋭も池莉も、祖父母や父母を振り返る。

しかし、彼らの過去は自分の過去ではない。それは、自分に、振り返る程の過去がないということなのだろうか。いや、そんな筈はない。どんなにささいな、ちっぽけな人間にせよ(そんな人間がいるとして)、その人の過去にどれだけのものが詰まっているかは計り知れない筈だ。むしろ、そういう人間の生きざまを描くことに文学の意義もあった筈ではないか。

そうだとするなら、今は、過去を描き、過去に固執する〝活力〟＝エネルギーが無くなったと言えるのではないか。少なくとも、少なくなったのではないか。私が、張賢亮と陸文夫の作品を読んで感じたのは、こういうことであった。

二人の作品には、活力がある。彼らにある若々しさは、正に中国文学の青春の光に溢れている。「新時期文学」の開幕を告げる当時（八〇～八三年）の感動を、大里、釜屋両氏の訳によって、我々は安心して読むことが出来る。

内容は深刻である。とりわけ張賢亮の作品――ここには「邢じいと犬」「霊魂と肉体」「土牢情話」の三篇が収められている――は、どれも堅苦しく重い。そして稚拙である。私は、このくそまじめな文を、青春の光と言ったので、決して張賢亮自身が青春であったわけではない。彼は一九三六年の生まれで、彼の青春は

「右派」としての労働改造に費やされたのであった。そういう彼の過去を彼は書き込む。

〝しかし、思うに、過去を消滅せずして、どうして新たに生活を始めることができよう。だから、私は書かなければならない。書かなければ。かつてのことを書き出そう、彼女のため、私のため、そして、よりよい生活を求める権利をもつ人々のために。〟――「土牢情話」一一九頁――「土牢情話」はたぶん彼自身のことが描かれているのであろうが、この引用でもわかるように張賢亮の発想は彼個人にとどまらないし、切迫した息づかいがここにはある。これが若々しさを感じさせるのである。

そもそも張賢亮は、議論好きな真面目な作家でありすぎる。右の引用だけで物足りなければ、〝含畜に富む序文〟と大里氏が言う「日本語版への序」を読めばいかに彼が真面目くさった男かわかる筈だ。だが、牢獄の仲間が一致して外部と連絡する手紙を考えるところなどは、ハラハラさせられて、作家である彼の遊び心を感じてうれしくなる。大里氏も「解説」で指摘するように、〝毛沢東のことば〟の多用は、建前のもとで生きる人間の知恵を示すと同時に、作家のユーモアがみられるところである。だから、大里氏が原作に無いのに、その部分を全て＜　＞の印で括ったことは、今の我々には殆どそれが毛沢東のことばかどうかわからなくなっているから、大変貴重で役に立つ。概して注は、現代中国の理解に役立つ労作で、それだけでも一読に値するのだが、私は原作からのこの逸脱を、作者の遊び心を見事に捉えた大里氏の苦心として拍手したいと思う。

「解説」に言うように、知識分子の苦悩や中国社会における位置や処遇が、張賢亮の小説によって、その実像と詳細がわかることは言うまでもないが、私が改めて訳を読んで感じたことは、知識分子〝私〟の恵まれた境遇なり待遇のことであった。文革なら文革で、恵まれていたからこそ生き残ったに違いない。特別の

待遇というにはあまりにも、つましくそして過酷な、ごく僅かの優遇であるが、それでも、これしきの優遇さえ受けられなかった者は死んでしまったに違いない。

だからこそ張賢亮は、生命の讃歌を書き綴った。書き綴るに十分な困苦と死との戦いを彼はしてきたのである。中国そのものと通底する自分の過去――人の生きる価値――を、彼は語る。

私が、青春の書だと言う所以である。

陸文夫には、張賢亮のような気負いはない。ずっと柔らかい。釜屋氏の訳――「ワンタン屋始末記」「路地の奥深く」「不平者」「消えた万元戸」の四篇が収録されている――も、ずっとのびのびしている。この中、「路地の奥深く」だけは五六年に発表された作品である。釜屋氏がこの作品を収録した意図は、陸文夫が蘇州の石畳に響く小人物の哀歓を一貫して描いてきたことを明確にするためであったろう。同時に、この作品によって、陸文夫がごく早い時期から、自己改造の問題に注目していたことがわかる。人は変わり得る、というのは楽観的な発想だ。人は確かに変わる。しかし、一定の方向に多くの人を同じに変えるのは、周囲に敵がいるという特別な情況の場合のみ、部分的に成果を上げたらしいが、どうやら、その壮大な試みは失敗に帰したようだ。私が敢えて言えば、もちろん政治として強制された改造のことを私は言っているのだが、陸文夫は自己改造などをまるで信じていなかったようで、それはこの五六年の作品からでもわかるような気がする。それでも〝私〟は政府組織の小役人として政治キャンペーンを推し進めた。だから、その後の作品には〝私〟を対象化する余地が生まれ、そこから含羞のこもったユーモア（恥かしい思い――「ワンタン屋始末記」）が生まれている。

陸文夫と張賢亮とは表裏の関係にあるようだ。

二冊とも、訳文はこなれている。注も工夫されている。「解説」は良い資料だ。難を言えば、知識分子とか自己改造とかを真面目に取り上げすぎて、作品の面白さそのものへの配慮が不足しているような気がした。どの作品も初々しく、スリルに富んでいるではないか。

最後に一言。張賢亮と陸文夫の初期の作品を今なぜ訳したのか、私には疑問であった。一つの解釈がこの文である。

六　心やさしき農民
――実感的中国農民像――

一

はじめに、きわめて個人的な体験を、ながながと書くことを、お許し頂こう。

一九八一年十月末のこと、私は、北京郊外からの上り列車に乗っていた。鈍行の列車は、裏が羊毛のマントや棉大衣（ミィエンターイー）（綿入れの外套）をはおった、垢じみた、日に焼けた農民たちで一杯である。彼らは身体も大きいが、態度も大きい。

足を投げ出す。横になる。爪子児（クワツェル）（西爪やかぼちゃの種）の皮をまき散らす。玉子の殻を落とす。たばこを投げ捨てる。痰を吐く。

そんな中へ、茶色のスリーシーズン・コート一枚で、寒さに震えながら、痩せこけた男が、ポツンと座った。

早速、彼らの好奇心を刺激した。しげしげと無遠慮に見つめる。鼻をならし、威嚇するように、棉大衣を

かき上げ、座り直す者もいる。しかし、声を掛ける者はいなかった。

この夜、私には、片言の中国語をあやつって、こういう中国人民と友誼を深めるなどという気力がなかった。

休むことなくがなり立てる車内放送の、若い女の声と京劇とが、一層疲労度を増した。私はただ、薄い外套に顔を埋め、寒さに震え、一刻も早く帰りたいと願っていた。

鈍行列車は、豊台駅の手前から、停車し始めた。だんだん停車時間が長くなる。駅でもない。信号待ちだろうか。急行や特急の通過待ちらしいが、それならそれで、放送でもあって然るべきではないか。

どういうわけか放送は、列車がとまり出してからプッツリと切れたままだ。終点永定門駅には、二十時五九分に着く筈だが、もうそれを三十分も過ぎている。現在どういう情況に置かれているのか、この事態はどう解決するのか、そういう認識を得させるために、放送があり、車掌がいるのではないのか。

車掌はどうしたのか。そういえば、それらしき者が、先程、袋を抱えて足早に前方へ行った。戻って来たら、尋ねてみるか。

また、実のたわわな柿の枝を左手に、右手にカバンを持って、通り過ぎた者がいる。どうやら彼も車掌のようだと気づいた時は、もう前の車輛に消えていた。そして、彼らはついに戻って来なかった。自分の荷物をまとめ、いち早く下車して下班（退勤）するのに忙しかったのだ。

だが、どうして誰も、車掌を引きとめて尋ねないのだ。私は、平然としている周囲の者に、腹が立ってきた。

ちょうどこの時、途中の駅から乗って来た、労働者風の男が、相棒にこう言った。

「おや、また遅れているぜ。汽車の遅れは『四人組』の搗乱（タオルワン）（ひっかきまわすこと）のせいだというけど、今でも『四人組』が搗乱しているのかね。」

私はうれしくなって、さすが労働者は違うなあと拍手でもしたくなった。

だが、その男の相棒からして、あいまいな笑いを浮べるだけで話に乗らない。周囲の農民たちは、クスリと笑うどころか、話さえ聞こえなかったように泰然としていた。

列車は、ともかくやっと動いた。そして、永定門の駅の明りが見え出した時、ボリュームを一杯に上げた女の声が、スピーカーから怒鳴り出した。

「永定門に着きます。終点です。列車が到着しても、先を争わず、秩序正しく下車しましょう。他の人に迷惑をかけず、明るい社会を作りましょう。私たちの服務態度に何か意見のある方は、遠慮なく申し出て下さい。それでは放送を終ります。みなさんよい御旅行を。さようなら」

私は、怒るよりも呆れてしまった。このような侮辱を受けて黙っていろという方が無理だと思いつつ天橋（テイイエンチヤオ）（駅の陸橋）から振り返って見た時、黙々と出口に押し寄せる人の波に、アッと思った。

どの男も女も、最低二つはある、ずっしりと重たそうなバッグや袋やいろいろな入れ物を、振り分けにしたり、天秤にぶら下げたりして、歩いている。私には、飛躍した「実感」があった。

この、沈黙した力強き人びとが、立ち上った時が「革命」とやらいうものなのだろう。「革命」とかいうものは、簡明な、権利の主張ではないのだな、と。

二

一九八二年一月号の『人民文学』で、邵燕祥（シャオイエンシアン）は、次のように歌う。

……
これまで会議など嫌いだった歯無しの老爺（おやじ）が、
まっ先に会に来て、われがちに口を出す、瓜を植えろ豆を植えろ、いや麦だ棉だ、と、
自主権を持ったればこそ発言権があるのだ。
……
認めるかどうか？　わしらは主人だ！
主人、それなら、おのれの公僕を選ばにゃならねえ、
選ぼうじゃねぇか——大衆の腹を一杯にできるなら、
自分は打倒されたってかまわねぇっていう幹部を。
……

この詩「客人の問いに答える」では、今日の政策はどうか、という客の問いに、主人は、「良くない」と答える。

なぜなら、以前ならば、他省の穀物やカナダの小麦まで食べられたが、今は、どこへ行っても、自分のと

ころでとれたものばかりだから、という「ユーモア」を導入としている。農村に新たな気運が湧き起こって、今や、「生活の主人」たちが、「主人としての生活」をするようになったと歌うのだが、どうも、この「ユーモア」は妙にひねくった言い方である上、底が浅い。

邵燕祥は、かつて、社会矛盾を正視し、積極的にそれをとり上げたため、一九五八年、「右派分子」にされた詩人である。「自主権」とか「発言権」、「主人」とか「公僕」などと大げさなことばを、こう安易に使っていいのだろうか。

このような詩を、かつて、われわれは読んだことがあるのではないだろうか。この詩にみられる、ちょっとうがっただけの発想を、明るい未来を内包した力強さ、自主的に立ち上った農民の姿とみなすほど、過去の経験は、脆弱ではない筈だ。

げんに、高暁声（カオシャオション）の描く農民陳奐生（チェンホワンション）は、そう単純に、生産責任制にとびつきはしない（「陳奐生の請け負い」『人民文学』一九八二年三月号）。

主人公陳奐生は、購買部の仕入れ係として成功し、六百元のボーナスを貰って以来、大隊の工場に勤務したいと思う。しかし、人民公社は、生産責任制の政策を受け入れ、その道を進む。作品は、陳奐生が悩んで何日も寝込んだ末、おじの意見を受け入れて、責任田を請け負うことにすることで終る。

おじは陳奐生に、「お前はもともとそんなに能力のある男ではない」と面と向って言うのだが、能力のない、平凡な男ほど、一時的な幸運に執着するともいえる。陳奐生は、一度味わった現金の味に拘泥するのである。この拘泥は、今の政策もいつ変更されるかわからないという不安に裏付けされているが故に、そう簡単に解消しない。

どう政策が変っても、損をしたくないという心理は、プリミティブなるが故に強力である。もはや、誰も逆らうことのできない動向のようだ。政策を荷なう村の幹部でさえ、工場に転じたいと願っていたではないか。また、定期的に現金収入を得られる労働者への羨望も根強い。それ故、個人的な欲望に拘泥する、陳奐生の頑迷な態度に対しても、今は、批判できる者が誰一人いないのだ。

ここに、農民が自覚的に、自己の充足を得ようとする態度を見ることは可能であろう。だが、農民が自立したということにはなるまい。まして、農民が何らかの権利を主張したとか、権利を持ったということにはならないだろう。そういう意識にめざめたとさえ言えるかどうか疑問だ。

金が金を生む世界があることを初めて知って、それに引きずられて、生命までおとしそうになった農民もいる。

窩窩老漢（びくびくじいさん）がそれだ（矯健「貯金」『人民文学』九月号）。皮肉なことに、彼は貯蓄所の前で、ずっと物売りをして来たのだが、一九八二年の初め、五百元の金を貯金するために、この貯蓄所のガラス戸の中の世界にはじめて入ったのである。

その「世界」は、一〇〇元が五年後、三九・六元の利息を生む世界であった。彼の算盤は、こうはじく。もし毎月一〇〇元貯金すれば、五年後には、毎月四〇元ほどが手に入るではないか。

以後、彼は五年後の安定した生活のために、家族にも金を渡さず、魚の密売にまで手を出して、金を稼ぐ。毎月四〇元ほどの定期収入を得るために、毎月一〇〇元稼がねばならない。彼は、一〇〇元に追われ、病み、路傍に倒れる。幸い通りかかった貧農の友人に助けられる。この貧農の友情によって、目を開かされた彼は、「たとえこの身が貧しくなろうとも、心まで貧しくなっちゃいけねぇや」と笑う。笑いながら、貯金すべて

を解約することで、作品は終る。

作者は、金の世界に、心が打ち勝つことで、作品の決着をつけるが、本当にそんなきれいごとで解決すれば、苦労しない。窩窩老漢も、自分の、大きな充足を求めるため、生臭い欲望にうごめく農民の一人だからこそ、現金の魅力に翻弄されるのだ。

……彼は生れて初めて、豊作の喜びを感じなかった。穀物なんか何の役に立つというんだ。集団のものじゃねぇか。自分のものにできやしない。金になりゃしねぇ……

彼の一〇〇元を求めての、徐々にあくどくなる努力は、痛々しくも現実味を増してくる。そこに感ずる哀切な思いは、むしろ、自立的な権利意識とは無縁のところに生ずるのだ。

金河（チンホー）の描く、「未練だけでなく」（『人民文学』一一月号）では、とうとう、集団の家畜を個人の手に戻してしまう。

家畜は、各自が請け負うのだが、ある貧農は、「分ける、分ける」と口をすべらせて、書記をいらいらさせる。どの家畜を誰が連れていくかはくじ引きによる、と決められた。農民たちは、あの馬がいいの、この牛がいいのと落ち着かない。書記にすれば、それはとりも直さず、自分の二五年間の敗北の結果ということになる。だが、村人たちは、期待にはしゃいでいるではないか。

老書記は認めざるを得ない。「集団――社会主義、個人――資本主義」という簡単明瞭な理屈でやってきた努力も、村を裕福にしなかったという事実を。請け負い制にしたら、急に富んできたのだ。

思えば二五年前の、人民公社化運動の時は、ドラや太鼓に爆竹まで鳴らした。その音に促されて、農民たちは、自分の家畜を連れて来た。いま、家畜を連れ帰る彼らには、わざとらしい鳴り物の音はなく、寒風が吹くだけだが、彼らが心から喜んでいないわけはない。

正月の六日、東北の農村、張家溝（チャンチアコウ）での話である。

三

「『傷痕』が去り、『愛情』も去って、今は『新人新気風』の波が押し寄せて来ている」と、李国文（リークオウエン）は、主人公H君に言わす（「貧乏ねえさん」『小説界』一九八二年二期）。

某省の新進作家H君は、貧乏な従姉（ねえさん）をモデルにして、農民を描いてきた。だが、新人新気風の時代の農民が、描けなくなった。

そんなH君のところへ、従姉が突然訪れて来るのだが、なるほど、自分が育てたH君の子供の顔を見に、年末にひょっこり出て来て、春節（チュウンヂエ）（旧正月）直前に、H君夫婦に迷惑をかけまいと、ふいと消えてしまう、気の利いた粋な従姉の形象に、現実感があるとはいえない。むしろ、田舎からのこの不測の客に、右往左往する都会のインテリ、H君夫婦の姿の方に、リアリティがある。

それは、作者のとらえる「新人新気風」の不的確さによるものであろう。

生産責任制によって引き起こされた、農民の経済的向上による、ある種の気運をさして、「新人新気風」というには違いないが、私には、現金を手にして、自分の欲望を、可視的なものに具現しようと精を出す農民の、生臭い動きが、それのように思われる。

彼ら彼女らは、個人の、より豊かな充足のため、ことばは多くないが、おずおずと歩み始めている。寡婦の再婚や農村の二男坊三男坊の結婚が、作品にとり上げられるのも、この線上にあろう。どの作品も、生産責任制によって、簡単に収人が増加しているのが気になるが。

生活とは、まさに、こういう人びとの欲望の集積であろう。その欲望をぶつけあい、生臭い息を吐いているのが、「人民」なのであろう。

李虹（リーホン）の「心やさしき大地」（『人民文学』一月号）は、もと幹部として文革を指導した沈衍（シエンイエン）が、再び陝北の村を訪れる話である。

主人公は、農民にわびを言うことによって、文革に決着をつけたい。そのために、わざわざ北京からやって来たのである。インテリとしての彼には、その決着なくしては、現状を肯定し、歩み続けるわけにはいかないのだ。

だが、農民たちは違う。彼らは、この、もと生産隊長の文革中の行為などに、拘泥していない。現在としての、生活の豊かさこそ問題である。

文革時、沈衍の指導のもとで、つるし上げをくった農民も、問題なのは、そんな「過去」のひっかかりではない。沈衍とて、当時は強制されて、しぶしぶやったことではないか。

ある農民は、一束の一〇元札を出して言う。

わしはテレビを買いたいんだが、ここらじゃ買えねぇ。嬶（かかぁ）は、沈隊長さんは大幹部でいなさるし、北京ならきっと買える、と言うんじゃ。すまねぇが、ひとつ、お世話願えねぇだろうか……

農民たちは、権利だ権力だと主張しはしない。貪欲で、あさましく、それ故に、ふてぶてしく、逞しい。自分の欲望を充足することにのみ懸命だといえる。だから、権利意識にめざめた行為があふれ、自覚的な自立的な農民が立ち現われた、とみなすことに、慎重でありたい。

それは、歴史的教訓ではないだろうか。

四

農民の、あの黙々とした態度を、現代的な都会の目から見る時、実にまだるっこい、どうしようもなく遅れたものに見える。何千年もの歴史的停滞と、苛酷な自然の前に、私などは、思わず叫び声を上げ、疲労し、逃げ出したくなる。

しかし、その泰然とした、多くのものを埋没させてしまう、懐の広さは、まさに、「心やさしき」としか表現しようのない、より大きな何ものかを、内包している。

中国の農民たちに、作家たちの筆を通じて、少しずつ自我意識にめざめるであろう、欲望充足への蠕動を見た。それは、たとえ、かすかで、長い道のりを必要とするものでも、いつまた、自主や自由への自覚的動きへと変換しないともいえないではないか。

しかし、もしそうなるとしても、農民の立ち上りは、直線的ではなく、とてつもなく息が長いものであろう。

以上、私の感想を書き並べてきた。その失礼をおわびするとともに、もう一つつけ加えることを、お許し

願おう。

私には、忘れられない「実感」についての会話がある。

私「中国の店員の態度は、そりゃ悪いですからね。悪いというより、もう、売りたくないとしか考えられませんよ。そこに品物があっても、没有（メイヨー）（ない）と言うんですから」

X先生「そうだろ。彼らは待ってましたとばかりに、没有と言うだろ」

私は、一九八〇年から一九八二年初めまで、北京に居た。このX先生は、ほぼ半世紀前に、北京に居たのである。「中国の店員像」について、これほど見事に言い当てたものはないと思う。

言うまでもなく、店員すべてがこうであったわけではない。品物が「没有」なのに、わざわざ倉庫へ行って、持って来てくれた、親切な店員も多いのだ。

中国（北京）の店員は、客が口を開くや否や、待っていましたとばかりに「没有」と言う――こんな店員像に、どれほどの普遍性があるのだろうか。

だが、中国の店員はどうですか、と質問されたら、私は今も、こう答えるであろう。

この「実感」の真実性について、私は、譲るつもりはないから。

一九八三年二月六日

七　戴光中著『趙樹理伝』
――「時代」への執着と拒絶

一九四二年、中共の太行区党委員会が文芸座談会を開いた折、普及と向上をめぐって激論になった。その時、のっそりと立ち上がって、「観音様が蓮台に御座れば、祥雲たなびき、甘露が下り、世の災難お救い下さる……」と読みあげた男がいる。爆笑を制して、こういう俗文学に学ばねばならぬとこの男は主張した。言うまでもなく、この男が趙樹理である。

『趙樹理伝』の若い著者戴光中は、当時の新聞によりながら、さらに詳述する。

この座談会は、一二九師政治委員鄧小平の開幕の辞で始まった。鄧小平は、農民を味方につけるという「具体的政治任務に服務」するよう求めた。しかし、「五四」以来の新文学にたずさわってきた文化人四百人余りは、普及と向上について抽象的に言い争うばかりであった。その争論が高まった時、訥訥としかも断乎たる態度で、趙樹理が立ち上がったのである。だから、たちまち会場は笑いの渦となったが、「また大声で叱責する声もまじっていた」のである。

座談会終了にあたって楊献珍が結語を述べた。これにある男が反対した。大衆は量として多いが、遅れている。偉大な作品は大衆のことばでは書けない、と。

その時――著者は述べる――趙樹理が立ち上がった。彼はまっすぐ前を見たまま、落着いてこう言った。

「大衆がたとえもっと遅れていても、結局のところ大多数なのである。大多数の彼らを離れたら、偉大な抗日戦争も、偉大な文芸もないではないか」

以上の紹介は、絶対多数としての農民（或いは人民）のために作品を書くという政策が、どのようにして効力をもち、定着したかを、よく説明する。趙樹理という生身の人間、及びその人間が書いた作品という実体によって、文化人たちは、根強く反発するにせよ、反対できなくなったのである。趙樹理と「時代」との接点を象徴する場面であった。

趙樹理は一貫して、耕作する農民の利益を考え、表裏のない行動をする人物であり、そういう人物を好んだ。従って、一九五八年からの大躍進時期の、実態を無視した幹部たちの「浮夸」（調子の良いことを言って表面だけを飾ること）の作風に我慢がならなかった。彼は下放先の人民公社を調査し、いかに現行の政策が現場と遊離しているかを報告し、上級に訴える。このような言動が批判を招くこと言うまでもない。趙樹理のこういった政治音痴のやり方は、また、現場の人びとからも迷惑がられ、邪魔者扱いされることになる。

趙樹理はそこで、当代の英雄人物を描かず、地道な生活者である実務家や、農民の利益をはかる経営家を描く。たとえば、『手袋のはめられぬ手』という小品がある。主人公の老人が、息子夫婦から楽隠居するよう贈られた手袋を、あれこれ仕事に手を出すのではめる暇がない。そこで、この手袋ははめられぬと返却する話である。

この作品は、これまでの作風とがらりと変っている。正面と反面という対比的な人物や風刺対象となる人物も登場しない。また、具体的な問題を解決するための作品でもない。

『趙樹理伝』の著者戴光中は、趙樹理は時代に執着する人であり、一心に政治に服務する作家である、という。だから、この小品の時代背景を調査し、作品が「時代」への反措定として意味をもつことを述べる。

趙樹理が時代と接点をもち、常に時代に執着してきたこと、換言すれば、政策に服務してきたこと、著者の言う通りである。また、厳しい時代背景の具体的解明にも感心させられる。だが、情況の厳しさをこうして知らされてみると、また別の感想を私はもつ。

『手袋のはめられぬ手』の主人公の農民には、下放先の生産隊での挫折を経た趙樹理の感慨が托されているのではないか。「時代」から拒絶される挫折を経て、わが思いを作品に托す文人としての一面が、ここに見出されるのではなかろうか。少なくとも、具体的な解決策を示すという直接的な次元ではなく、問題を濾過して作家の心情を再構成する虚構と現実との対立を、趙樹理はいま一度考慮せざるをえなくなったと言えないだろうか。

ともあれ、『趙樹理伝』は、趙樹理と時代との接点或いは拒絶をよく描いていて、現時点でも有益であるし、おもしろい。趙樹理の自己批判書である『歴史をふり返り、自己を認識する』を駆使して、耕作する農民のために生涯を終えた革命者としての像を、丁寧に浮かび上がらせるが、もし時代との接点の回路に、文人としての考慮がもう少し加わるならば、趙樹理像にいまひとつ、ふくらみが加わったかもしれない。

八　趙樹理の故居をたずねて

「趙樹理先生は何を食べるのがお好きだったのでしょうか？」

一九八一年八月一五日、私は、山西省東南地区（晋東南という）、正式には、沁水県潘荘公社尉遅大隊という村の家で、今年六四才の趙玉琴さんに、こう質問していた。玉琴さんは趙樹理の妹さんで、写真で見る趙樹理の面長な顔によく似ている。目が細い。とても上品な婦人である。この家が趙樹理の故居である。室内には、親族の方や趙樹理と面識のあった方などが座っている。趙樹理の長男趙太湖（八二年一月、胃癌で亡くなられたという）の長男趙宇峰さん（三四才）、趙樹理の三男趙三湖さん（三二才）、趙樹理の娘趙広建さんの長男趙暁陽さん（二二才）、そして、今回の私の旅行にずっと付き添って下さった、趙樹理の二男趙二湖さん（三四才）。ほかにも、小学校の同級生李育秀さん、一番お年寄りで趙樹理の幼い頃を知っている呂培信さん。さらには、尉遅大隊党支部書記馬海正さん、潘荘公社党委書記宋維必さん、沁水県文化委員張青化さん、県の創作部長呉佩光さん、県の文化館の潘保安さん。まだまだいる。ふと外を見ると、窓や入口からのぞき込んでいる子供や娘たち、さらに、向うの塀の上にも人が乗って、こちらをのぞき込んでいる。

いやはや大変な騒ぎである。十時半頃、村の入口に着いた私は、村の様子を写すべくジープから降りてカメラを構えたのだが、その私めがけて、よくまァこんなにいるものだと思うほど、子供たちがワァーッと押し寄せてきた。なにしろ私は、「この村初めての外国人」なのである。おまけに今は、夏休みであり、さらに、雨が降って、野良仕事は休みとなったという。男の子という男の子は、みんな紺の横縞のシャツを着て、私が動くそのそばを、押し合いへし合いついて来ては、大人に叱られる。私の額からは、とめどなく汗が流れ、自分で自分の足が地に着いていないのがよくわかる。実のところ、私は「初めての外国人」なのではない。それは、彼らの外交辞令で、正確には「解放後初めてこの村に入れた日本人」なのである。ここは、有名な抗日根拠地である。少くとも二度にわたって、日本軍がこの村を占領している。一九四三年十月には、趙樹理の父趙和清（チャオホーチン）が、日本軍に連れ去られた。日本軍は、この尉遅村や近隣の村から、男を刈り集め、隣りの県陽城（ヤンチョン）に連れて行き、打ち殺し、大きな〝茅坑（マオコン）〟（便所）に放り込んだ。男たちは何層にも折り重なった。義父の弟も、この時殺されたのだと、これは、趙樹理の奥さん関連中（クワンリエンチュン）さんが、太原（タイユアン）の家で私に語ってくれた話だ。「私はこの目で見ました」と関夫人は言う。〝太君（タイチュン）〟が、当時六才の娘広建さんを連れて行こうとし、それをお爺さんに当る和清さんが救い出したのだそうだ。〝太君〟とは、日本軍の将校、つまり日本軍のことである。一九四三年十月といえば、趙樹理の代表的短編小説『小二黒結婚』が、やっと彭徳懐（ポントーホアイ）将軍のお墨付きの力で出版されることになった時である。趙樹理の、当時あまり理解されなかった文芸大衆化運動の、一つの成果が、世に出ることになった時なのであった。

関連中さんの話を聞いたのは、私が太原に着いた八月一一日の夕方のことであった。彼女のことばはまるで私にはわからない。傍らの趙二湖さんとその奥さん郝蘭（ハオラン）さんが〝普通話（プートンホア）〟に直してくれる。「山西省の方言

も随分ひどいものです。県ごとに違います。ですから、今回の旅行には、私がお伴します」。こう言う趙二湖さんは、一九七一年、農村で郝蘭さんと知り合い、結婚したという。彼らは、今私が座っている趙樹理の故居の、〝西楼〟の二階で結婚式を挙げたという。「私の父もここで結婚したのです」と趙二湖さんは、いくぶん誇らしげに言う。一九七一年といえば、まだ趙樹理の名誉回復はなされていない。それどころか、三度めの趙樹理批判の高まり（高潮という）の時であった。〝反党文芸権威〟という札付きの悪人である趙樹理の息子と結婚することなど、両親は勿論、世間も許さなかった。彼らは、だからこそ、趙樹理の故居で結婚式を挙げたのである。郝蘭さんは、大変勇気のある方（勇敢という）であったが、この村の人々も、劣らず、勇気ある人々であったのだ。

この屋敷、すなわち趙樹理の故居は、所謂〝三合院〟で、北に〝堂楼〟（二階建てのおもや）、東西にそれぞれ〝楼〟（二階建ての建物）があって、〝西楼〟〝東楼〟。南には建物がない。もしあれば〝四合院〟ということになる。清の乾隆年間（一八世紀後半）の頃というだけで、いつ建てられたか誰も知らないが、随分古くからこの屋敷はあって、趙樹理の先祖趙英武が〝武挙人〟（武芸によって挙人の試験に合格した人）になった時、建てたのだろうという。灰黒色のレンガと太い木組みの堅固な家である。趙樹理は、結婚後〝西楼〟の下の部屋に住み、今私が座っている〝堂屋〟（堂楼の下の部屋、おもての間のこと）には、お父さん夫婦が住んでいたという。〝東楼〟には、同じ趙姓でも、趙樹理家と関係ない人が住んでいたという。〝西楼〟の南側には、後から建て増しした部屋があった。この〝三合院〟は、この夏初めての雨という朝からの雨に洗われて、私には、妙にまぶしかった。生き生きとして私に迫り、とても、今は誰も住まず使われていない屋敷とは思えなかった。

〝堂屋〟の三間の部屋のうち、二間を続けて客間にしてある。もう一間の寝室には、暖房用の〝炕〟があった。客間にある、大きな文机と本棚と本箱それに衣裳入れが、趙樹理が使用したものという。部屋中央に並べてある立派なテーブルや椅子などは、私の為に特別に運んで入れてくれたらしい。テーブルの上には、ひまわりの種、かぼちゃの種、落花生、それにリンゴが山盛りだ。このリンゴは、趙広建さんが、「真の農民となって、農民の為に働くように」というお父さんの説得を受け入れて、この尉遅村に住みついた時、植えたリンゴだそうである。今は、弟の趙三湖さん一家が、この果樹園を管理している。

有名な、趙樹理の、娘広建にあてた手紙は、一九五七年に公表されたのであるが、私は趙二湖さんにこう言った。それは、沁水県に別れを告げ、侯馬から太原に帰る汽車の中でのことであった。「お父さんも偉いけど、お姉さんも、よく説得を受け入れましたね、偉いですよ。日本ではどんなに言っても無理でしょう」と。趙二湖さんは、こともなげに言う、「いやァ姉だって、手紙一通によって納得したわけじゃありませんよ。だけど、あの手紙が公表されてしまったでしょう。それで仕方なく諦めたんですよ。それに父は、尉遅村の通称〝食堂院〟と言われる所に、姉が住む家を建てたのです。その家は今、大隊の医務室になっていますよ」。この若い作家趙二湖さんは、《汾水》という山西省文連の機関誌一九八一年一月号に『人過興旺峪』という短編小説を発表している。「趙樹理先生の作品は、率直に言って、今でも読まれていますか？」私は、この不躾けな質問を、多くの人に浴びせたが、趙二湖さんだけが、「あまり読まれなくなっています」と答えてくれた。声には一種の苦渋のひびきがあったが、その苦渋は、一人の作家として、自分の基盤をどこに置いたら良いのか、まだ迷っている所から出ているもののようであった。父のまねはもはやできない。農村の若者だって、都市での愛情物語、例えば《作品》という広東の雑誌に載ったものや《十月》という北京の雑誌に載

ったものの方を、より好んで読む時代ではないか。彼は、大体こんなことを語ってくれた。

私はその時、ふと、「趙樹理が死んでから、急に趙樹理を研究する人間が多くなった。研究するのも結構だが、趙樹理から一体何を学ぶのか。趙樹理は、本当に〝全心全意為農民服務〟（誠心誠意農民の為に奉仕する）であった。趙樹理の一生は、心の底の底から農民の為のものだったのです」と強調し、この男は言っていることが本当にわかっているのかとばかり、ジッと私の目をのぞき込み、私の推測で言えば、あァこの男もうひとつわからないのだと、フッと諦めに似た目の色に変えた、趙広建さんのことばが思い出された。あの目の変化が、忘れられない。そこに、私は、彼女の焦躁と諦念を感じたが、一方、私自身が急に軽く感じられたのだった。

「趙樹理先生喜歓吃甚麼？」（趙樹理先生は何を食べるのがお好きだったのでしょうか？）私は、もう一度、横に座っている趙樹理の妹趙玉琴さんに尋ねる。正直言って、この程度の中国語は、いくら私の発音があやしげであるといっても、通ずると思っていた。しかし、彼女には通じない。すかさず、潘保安さんが言い直してくれる。「他説、你的哥哥呀、平常吃飯的時候、他喜歓吃大米呢、還是小米呢？」（お兄さんはね、おこめを食べるのが好きだったの、それともアワかって聞いてるよ。）

ことばが通ずるというのは、必ずしも発音の問題だけではない。文法の問題だけでもない。いろいろなケースがあるが、そのうちの多くの要因は、このような具体性の差異によるといってもよさそうだ。従って、私と趙二湖さんとの間では、極端に言えば、単語一語だけでも意志の疏通ができた。一緒に七日間すごしたことにもよるが、何より彼は、誠心誠意私の便宜のみを考えてくれる人であったのだから。しかし、それでも通じないことは、当然あった。どうやらその原因の一半は、たとえ私のつもりとしては随分具体的にした

と思っても、やはり抽象的で漠然としたものの言い方の時のようであった。発想の違いが、そういう所に出るのであろう。私は、『老二黒離婚』という短編によって一躍有名になった、若い作家である潘保安さんの、噛んで含めるような質問の仕方に感心しながら、答えを待っていた。彼女が潘保安さんに、ささやくように言う。彼女は、私のすぐ左隣りに座っているにもかかわらず、わからない。そこで今度も、潘保安さんの口許に注目する。

「その頃農村は、とても貧乏で苦しかった。趙樹理とて同じで、食べられればよいので、何が好きだの嫌いだのと言っている暇はなかった。」

私は、額、首からドッと吹き出す汗を、ハンカチで拭った。全ての視線が私に注がれている。この部屋、〝院子〟（庭）、向うの塀の上からも。私は、自分の軽さをこの時も感じたのだった。でも、言ってみれば、私がわざわざこの地を訪れたのも、この為にこそ来たのだと言えないこともない。軽さを感じたということは、何かを体得したとも言えようから。趙樹理が苦労したことなど、多くの文章によって知っている。趙樹理の出身が、貧農になるのか中農になるのか、それも最近の研究によって知ることができる。潘保安さんの自製のノートには、聞き込みや調査による趙樹理に関する文字がびっしり詰まっていた。さらには、山西省文連の董大中さん、北京大学の黄修己さん、また、この旅行のきっかけを作って下さった上海文学研究所の陳嘉冠さんなど、四十代半ばの研究者が、次々趙樹理の年譜や評伝を書いている。でも、知識とは違う教示を、私はこの時感じたのだった。

趙樹理が、いかに農民を熟知し愛したかについても、多くの文章が述べている。今回も行く先々で、人々は喜んで語り聞かせてくれた。趙樹理の長編『三里湾』の舞台になった、平順県川底村では、その小説の

主人公〝王金生〟のモデルと言える、全国労働模範郭玉恩さん、それに川底大隊の郭計好さんまでもが、身振り手振りで、趙樹理がいかに農民の食糧を大切にしたかということや、夕食後趙樹理主演の独得の音楽会のことなどを話してくれた。それは、太原から長治に飛行機で飛んだ八月一三日のことだった。趙樹理は、会議の前や食後など、ちょっと暇をみつけると、箸や棒で茶碗やテーブルをたたき〝上党梆子〟をうなったという。そういえば、彼は死の寸前にも、指でトントン拍子をとっていたという。一九七〇年九月一八日、太原迎沢公園の湖浜会堂で五〇〇〇人の趙樹理批判大会が開かれた。開会まもなく、彼は椅子から床に崩れ倒れた。董大中さんは、たまたま単位（勤務先のこと）からの切符が手に入ったので、見に行ったという。彼の席は後ろで、よく見えなかったという。趙樹理の親友史紀言さんは、自分も〝走資派〟として批判されていて、大会は見ていない。五日後死んだという文章によって趙樹理の死を知ったという。趙広建さんは、半月前に会っただけで農村に行かされ、その後、太原招待所に軟禁された。趙二湖さんは、別れの会見も許されず、洪洞県の農村に行ったままであった。当時一九才の趙三湖さんだけが、奥さんのかわりに食べ物を届けに行き、どうやら、いまはの際に間に合ったが、趙樹理はもう口をきくことができなかったという。現在の山西省高級人民法院、その入って左側の建物の一階事務室で、趙樹理は息をひきとった。二三日午後四時一七分という。

趙二湖さんはよくこう言った。「父に是非、今の農村の姿を見せたかった。父がやろうとした農民の生活向上が、随分なされていますからね」。趙樹理は、小説を書く為に農村に行ったのではなかった。小説は、誤解を恐れず敢えて言えば、まさに宣伝の為だったと言ってよい。農民の、政治的・経済的・文化的向上、これが趙樹理の終生の願いであった。低俗な、封建的な、愚昧な思想・思考を変革する為に、彼は小説や劇を書

いたのだ。彼は、新しい資料によれば、一九三四年に、大衆語について論じており、中国語のローマ字化の可能性について言及している。日付けだけから言えば、それは魯迅のローマ字化への言及とほぼ同じである。一九四二年一月、河北省渉県で開かれた文化会議で、五百人近い文化人を前に「観音さまが蓮におりりゃ、瑞雲ひとひら舞い下り……」とやって、文芸の大衆化を熱っぽく説いたのも、一九四二年五月の延安における毛沢東の文芸講話より、前のことである。彼は、その土地（晋東南）の農民の嗜好を離れては論じなかったし、書かなかった。そこに趙樹理文学の特殊性と普遍性とが含まれることになったのだが、ともあれ、彼が共に暮した農民が好んだ劇に〝上党梆子〟があった。

〝上党梆子〟とはいかなるものか？　私は、それも知りたかった。長治市の〝八一〟広場に、芝居小屋が掛けられているのを見た時（八月一三日）、私は大いに興奮した。これが地方劇場なのだ、と。丸太で組んだ舞台の二階には、人形の役者が何か有名な場面を再現している。周囲をテントで囲み、収容は、千人でも一万人でもかまわない。今夜の出し物は、「楊家将」の一つで昨夜からの続きものという。ただ惜しいことに、これは河北省邯鄲から来た豫劇（河南省の地方劇）ということで、上党梆子ではなかった。裸電球の遙か上空に、月が出ていた。

「〝上党〟とは、この長治を中心とした地域の名前で、潞州とも言われた。沁河流域の東側を言い、西側の沁水県の方は沢州と言った」。晋東南地区文連主席の韓文洲さんは、こう説明してくれる。翌日、車で長治より沁水にむかう途中、妙な一群を私は見た。華やかな飾り物や籠に食物を入れた四、五人の一団を何回か見たのだ。同乗の申双魚さんによると、お墓参りだと言う。そういえば、紙銭を持った子供もいる。きょうは八月一四日、日本では旧盆の頃ではないか。路上を歩く人が多くなった。腰の曲った纏足のお婆さんも、

杖をつくお爺さんも、自転車の若夫婦もいる。娘たちは娘たちのグループ、男の若者は四五人の一団となる。賑やかだ。高平県趙荘公社に来た時のことだ。申双魚さんが「芝居だ」と叫ぶ。そこには灰黒色のレンガで作った建物があって、それは常設の舞台なのだ。前の広場は、もう大変な人だ。綱を張った外側は売り物屋。食べ物に、刺繍用品が意外と多かった。綱の内側が観客席で、子供たちが走りまわり、老人が前の方に座って開演を待っている。韓文洲さんと申双魚さんは、さっさと舞台裏に入って行き、しばらくすると大声で私を呼ぶ。知り合いの陵川県上党梆子劇団の人だと紹介してくれる。座長は女の人であった。残念ながら、開演まで三十分もあるというので、別れを告げ、車に乗る。車がものの十分と走らないうちに、北王荘という所に出た。ここでも芝居をやるという。大変な混みようで車が仲々動かない。韓さんは車から叫ぶ、「おい同志、ここの劇は何だね？」「上党落子だよ」。〝梆子〟に〝落子〟、似たもののように思えるが、韓さんは、知る者にはまるで違うのだと言って笑うばかりだ。そばから趙二湖さんが「ホラ、こういうのを〝対台戯〟というのですよ」と教えてくれる。劇の競演だ。私は、八月中旬に来ることができて本当に良かったと思った。こんなに小屋掛けが見られるのも、今が農閑期だからなのだ。晋東南は、有名なアワの産地だ。今年はひどい旱魃で、収穫はよくないという。

沁水県城には夕方六時頃着いた。長治から一七五㎞、車で三時間半。沁水に近づくと、野兎やリスが道を横切ったりした。ここでの歓迎ぶりは、いちいち書き尽くせない。なかでも、上党梆子を見せてくれたことには、感激した。出し物は「孟麗君」。元朝の雲南地方の話だ。〝梆子〟という一種の板で、拍子をとる。その高い音は、いつまでも雨の招待所にひびいた。だが正直言って、私には京劇とそんなに違わないように見えた。「とんでもありません。大違いです。京劇だって沢山流派があります。それぞれの特色を知るまで年季

がいります。上党梆子と京劇の差を知るにも、それ相応の年季がいりますよ。簡単に言えば、同じ山西省の劇でも、蒲劇というのは軟かい。何せ〝西廂記〟は、ここの劇ですからね。沁水の上党梆子は、武張ったものが多くて硬いのです。」と、北京に帰ってからの話だが、黄修己さんは、苦笑しながら言った。

私には、その〝軟〟も〝硬〟もよくわからない。ただ、のどの奥から、すり切れるような声を張り上げた、ある歌い手の姿が目に浮んだ。朴訥な、四十すぎの男が、黙って皆に合図すると、〝鼓板〟を打ち始める。いよいよ〝八音会〟の〝表演〟（実演）の始まりだ。場所は、尉遅廟の舞台の上。趙樹理の故居で、手打ちそば〝拉麺〟と餃子を食べ終わった午後二時すぎ。この舞台は、もともとは〝看台〟（観劇台）で、向い側にあるのが本当の舞台であったとか。それは、今はレンガを積み上げ、戸に錠が下ろしてある。左右に楼がある。「昔は、女はあの楼から劇を見たのです。この〝院子〟では、男だけが見ることができたのです」。沁水県の創作部長呉佩光さんが、ここは私にまかせてくれとばかりに説明してくれる。〝唢呐〟が吹かれる。「このチャルメラと鼓板（太鼓と快板）とが、〝八音会〟という一種の楽団の主要な楽器で、鼓板が特に重要です。趙樹理は、この鼓板がうまかったのです」。廟内は、今、立錐の余地もないくらい、人で埋まっている。村の一四六戸六〇一人が、演ずる一一人と、この私を見ている。呉佩光さんの指さす弦楽器（頭把・二把・二胡・三弦など）や銅鑼、大鈸小鈸を私が見るたびに、人々も今さらながら、その楽器をしみじみと眺める。もう舞台の上まで子供たちは押し寄せてきている。「その三弦の皮は何ですか？　ヘエ蛇ですか。日本では猫の皮がよく使われます」などと私は言う。「あの人は誰ですか？　鼓板をたたいている人です。とても趙樹理先生に似ているように思いますが」「そうです。彼は王興家といいます。ほら、先程の趙樹理の妹さん、趙玉琴さんの長男ですよ。ごらんなさい。歌っているのが、その弟です。王興邦といいます。」

奇しくも八月一五日、日本敗戦の日、私は趙樹理の故郷で〝八音会〟の特別公演（表演という）を聴くことができた。女性の声のような鋭い声の〝唱（チャン）〟は、上党梆子の一つ「八郎探母」の一節を歌った。恰かも趙樹理そのものがたたいているような、王興家さんの打ちならす鼓板の音は、高く雨空にひびきわたった。正直言って、どこの馬の骨かもわからぬこの日本人に、趙樹理を研究しているというだけで、晋東南の人々は、好意を示し歓迎してくれた。趙樹理の遺徳がしのばれるというものだ。私の趙樹理のイメージは、作家のそれというより、革命家のそれとして定着しつつあった。ひときわ強く打ちならした鼓板の音で、八音会の表演は終った。私は立ち上って、誰れ彼れとなく、〝謝謝（シエーシエー）、謝謝（シエーシエー）〟と繰り返したのだった。

（一九八一、八、二一記）

初出一覧

I 「新時期文学」——作家と表現

一　文学者の死について　社団法人・アジア調査会『アジア・クォータリー』一二巻二—三合併号（80・6）
二　中国「新時期文学」におけるABB型形容詞について　三重大学人文学部『人文論叢』四号（87・3）
三　「緑色」への挑戦——張潔から阿城そして莫言へ　社団法人・中国研究所『季刊　中国研究』八号（87・9）
四　「新時期文学」論への視点——三年を一単位として　京都大学人文科学研究所・竹内実編『転形期の中国』（88・3）
五　文芸上の極左路線——李剣「〝歌徳〟与〝缺徳〟」について　飈風の会『飈風』一二号（80・4）
六　小学課本『語文』札記　飈風の会『飈風』一六号（83・11）、一七号（84・7）
七　中央文学研究所について　燎原書店『燎原』二八号（86・9）
八　「晋軍崛起」——地方文壇の気魄　財団法人・霞山会『東亜』二三一号（86・9）
九　改革の動揺——中国映画、文芸の描くリアリティ　財団法人・霞山会『東亜』二六二号（89・4）

II 作家群——葛藤と動向

一　中国当代文学管見——一九八二年の小説について　飈風の会『飈風』一五号（83・3）
二　一九八三年の文学情況雑感——短編小説を中心に　社団法人・中国研究所『中国研究月報』四三四号（84・4）
三＊第六回優秀短編小説コンクール——〝善意〟の人物描写に傾く　財団法人・霞山会『東亜』二〇七号（84・9）
四　第七回優秀短編小説コンクール——人生への吐息　財団法人・霞山会『東亜』二一八号（85・12）
五＊一九八二、八三年の文学情況　財団法人・霞山会『中国総覧一九八四年版』（84・6）
六＊一九八四、八五年の文学情況　財団法人・霞山会『中国総覧一九八六年版』（86・7）
七＊一九八六、八七年の文学情況　財団法人・霞山会『中国総覧一九八八年版』（88・6）
八＊一九八八、八九年の文学情況　財団法人・霞山会『中国総覧一九九〇年版』（90・6）

III　書評その他

一　石上韶訳『巴金　真話集』　社団法人・中国研究所『中国研究月報』四三六号（84・6）
二　加藤幸子・辻康吾編『キビとゴマ――中国女流文学選』　大修館書店『中国語』三〇八号（85・8）
三　小島朋之著『変わりゆく中国の政治社会』　読書人『週刊読書人』（88・10・3）
四　蔣濮著　久保田・松本共訳『何処から来たかは聞かないで』　文藝春秋社『週刊文春』（89・12・28）
五　張賢亮著　大里浩秋訳『土牢情話』、陸文夫著　釜屋修訳『消えた万元戸』　社団法人・中国研究所『中国研究月報』五四四号（93・6）
六　心やさしき農民――実感的中国農民像　平凡社『月刊百科』二四八号（83・6）
七　戴光中著『趙樹理伝』――「時代」への執着と拒絶　東方書店『東方』一〇二号（89・9）
八　趙樹理の故居をたずねて　大修館書店『中国語』二六四号（82・1）

＊印は、原題を一部変更したもの。